



ある日のゼミのスケッチ

坪井 秀人（日本文化学）

日清戦争に勝利した日本は 1895 年から 1945 年まで台湾を植民地統治する。個人の一生にも匹敵する時間だね。もともと多様な「原住民」（台湾での呼称）が住んでいた島に漢民族（本省人）が入りこみ、中国語が変化して台湾語が出来るけど、体系化には至らない。

ベネディクト・アンダーソンは土地に根ざす言語を共有することが国民国家を形成すると指摘したけれど、台湾でも「台湾話文」という、音声表現を自分たちのやり方で文字化しようという運動があったものの、日本時代に日本語が「国語」として強制されて頓挫。1945 年には蒋介石が「外省人」と呼ばれる人々を大陸から連れてきて国民党政権によって台湾を支配する。今度は日本語を放逐して大陸の北京語を国語として強制する。1980 年代になって台湾語が尊重され「台湾文学」という学問分野が出来るのも、民進党という政党が新たに出来て外省人中心の政治バランスが変わったからだ。

台湾の言葉（国語）の歴史には原住民の言語／台湾語／日本語／北京語という「層」があることがわかるし、その人の政治的立場で捉え方が全く変わる。このことは絶対に無視できないね。ある研究者は学会で台湾語でこうした問題について語ろうとして失敗した経験を語っている。中国語や日本語などの覇権言語が持つ体系的な強度が台湾語にないからなのか。このことを近代化過程での日本語と英語他の西欧語との関係に置き換えてみたらどうだろう。体系的強度を持たない少数言語は常に覇権言語に服属しなきゃいけないのか。どうだろうか。ここでやっと「日本（語）文学」とは何かという議論の起点に立ったわけだね。

じゃあ始めてみようか。



名大キャンパスにあるアート（フェリチェ・ヴァリーニの作品）。「日章旗」を連想するという声がある。君にはどう見えるかな？

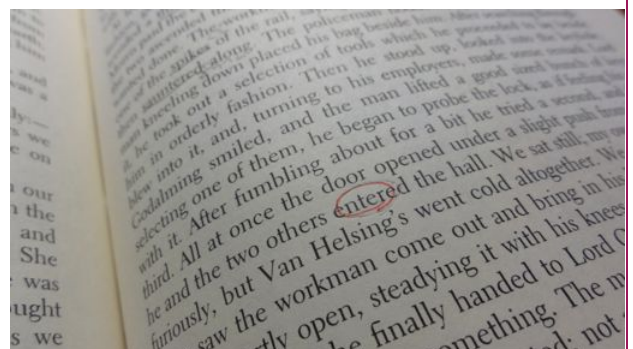
研究室紹介—File01

英語が紡ぎだす世界を旅してみませんか？

研究室名：英米文学研究室

皆さんは、日本語の小説を読んだことや、英語の小説を日本語訳したものを読んだことがあるでしょう。では、英語原文で作品を味わったことはありますか？ 英米文学専攻とは、まさにそれをするところなのです。

英語原文で文学・小説を読むことは、日本語の作品とは異なる世界を体験できます。その理由の一つは、英語の「語感」によるものです。例えば、単語一つを考えてみても分かります。英単語を覚えるときに、日本語の意味をいくつも覚えますよね。それは、その英単語がそれだけ重層的な雰囲気を持っていることを示しています。勿論それが文学作品の中で発揮されていることも多々あります。例えば、『ドラキュラ』という作品の中では 'enter'



ブラム・ストーカー『ドラキュラ』より

という単語が度々登場します。文脈においては「(場所)に入る」と捉えればよいのですが、この単語には他に「劇に登場する」という意味もあります。ここで著者であるブラム・ストーカーが、この作品を劇としても思い描いていたことを考慮してみてください。すると、'enter' という語が使われるとき、その動作主は劇の舞台上に登場しているのだとも解釈できます。このように考えてみると、単語の持つ重層性によって作品の新たな見方・世界を発見できるのだと分かります。

また、英米文学研究室の特色として、短期・長期で海外留学をする学生が多いこと、年に二回、学外の先生をお招きしてのセミナーもあることが挙げられます。最後に、英米文学を専攻するために必要なことは、英語と文学の両方が好き・英語を読むことが好きということだと私は思います。その気持ちがあれば、英語が織りなす世界を旅することは楽しいことだと思いますか？

[村瀬 真耶 (学部3年)]

研究室紹介—File02

本を片手にフィールドに出よう！

研究室名：地理学研究室

名古屋大学の地理学研究室は、多様な経験を積み、自分の固定観念を打ち破り、世界観を広げていくのにつけての研究室です。地理学研究室に所属する多くの学生は、日本は北海道から沖縄、海外では欧米諸国はもとよりアジア各国に入り込み、緻密な調査を行っています。地理学教室では学部2年次より「地理学野外実習」という授業のもと、ほぼ一年間にわたり、文献調査およびフィールド調査、そして報告書の執筆、プレゼンテーションなどの訓練を積み、フィールド科学の技法を徹底的に身に付けていきます。そして、卒業論文や修士論文、博士論文の執筆段階では自ら研究テーマとフィールドを選び、研究に打ち込んでいます。このプロセスは笑いあり、涙ありの忘れ得ぬ貴重な経験となります。

また、地理学教室では「地域」の自然や文化を理解するための「巡検」が行われます。山梨県へのさくらんぼ狩り&ワイン巡検、信州へ活断層の露頭観察、木曾ヒノキの製材工場の見学等々です。タイやバングラデシュなどのアジア諸国の農村に、先生と一緒に調査に参加する学生も後を絶ちません。楽しくて仕方がないのです。

研究テーマは歴史・人文的なテーマから自然に関するテーマまで多種多様です。この多様性が、自らの固定観念を打ち破り、世界観を広げてくれるでしょう。卒業論文の例としては「フランス・リヨン都市圏における移民ロマのキャンプ地形成と排除に関する研究」や「八重山諸島におけるマングローブ林海側林縁部の立地変動と植生動態」など、フィールドワーク力を武器に様々な研究テーマに挑戦しています。

さあ皆さんも、一緒に「地域」に隠された秘密を、本を片手に解き明かしてフィールドに出ましょう。



地理学野外実習 (2013年は高知市) 前の室戸巡検

[権田与志道 (環境学研究科博士課程前期課程1年)]

最近の文学部

研究室を紹介します

授業紹介に代わり、本号から研究室紹介を掲載いたします。大学の組織はかなり複雑で、内部の人間でも専攻/専門とか講座/研究室とかいう言葉の使い分けに迷ったりします。おまけに学部と大学院の組織との間にずれがあり、上の地理学研究室のように学部は文学部所属でも大学院は文学研究科に存在していなかったり、日本文化学研究室のように文学研究科に現に存在していても、大学院のみの組織で学部学生はいなかったり、とてもわかりにくいです(詳細は文学部HPで確認して下さい)。そんな中、学生が日頃の授業ばかりか、折々の研究室の行事やフィールド調査などで文字通り「同じ釜の飯」を食い、学生生活をともにすることになるのは、大学院の先輩を含めた研究室の仲間です。そんな文学部の研究室の雰囲気を感じていただければと思います。(U記)